

令和7年度研究推進計画

三次市立三和小学校

学校教育目標

「自分らしさを育てる ～気付く・伸ばす・磨く～」

1 研究主題および主題設定の理由

(1) 研究主題

《三和中学校区研究主題》

ともに学び合いながら理解を深め、主体的に学ぶ子供の姿をめざして
～アクティビティ型授業の設定とファシリテーションを活用した指導方法の工夫を通して～

《三和小学校研究主題》

自分らしさを育てる児童の育成をめざして
～算数科における「児童とつくる評価シート」のさらなる効果的な活用を通して～

(2) 主題設定の理由

昨年度は、児童の自己調整力の育成を軸に、「知識を生かし深める力」「共に考え伝え合う力」「自ら関わり学び続ける力」の三つの資質・能力の育成を目指してきた。児童の自己調整力を育成するにあたり、ものごとを評価する視点を養っていくことは大変重要だと捉え、児童自らが評価の視点を創り、評価しながら自らの取組の方法や過程を省察していくツールとして「評価シート」を開発・活用してきた。「評価シート」とは、児童とともに、様々な教育活動で評価の視点をつくり、取組内容と資質能力に関して自己評価していくシートである。教師は、児童とともに、評価項目の作成【つくる】、評価項目に沿った評価【使う】、学びの省察、価値づけ【振り返る】を行ってきた。

その結果として、研究推進に関わる児童意識調査「評価シートを使うようになって起きた自分の変化」の記述欄には次のようなものが挙げられた。

〔動機付け〕(問いの表出)【つくる】

- ・評価シートがあれば、自分の考えが出てくるようになった。(4年生)
- ・自分の中で目標が生まれた。(4年生)
- ・どんな勉強をするか興味が出てきた。(5年生)
- ・はじめに「これをやるぞ!」と目標を立てるので、気合いが入る。(5年生)
- ・自分のやりたいことを表すことができるようになった気がする。(5年生)
- ・評価シートに書いたことを達成するために積極的になった。(6年生)
- ・好きな教科ができた。(6年生)
- ・自分ができるようになるために課題をいくつかつくったから、一つ一つ意識して取り

組めるようになった。(6年生)

- ・自分で何をすればいいのかを頭に入れて行動するようになった。(6年生)
- ・少しだけそのことに興味をもった。(6年生)

これらの記述を分析すると、目標や興味が生まれ、自らつくった課題に対して積極的に取り組むようになっている記述が見られる。また、自分で作った項目(学習活動・評価規準)であるため、何をやるのかが明確になり、見通しをもって取り組むことができるという記述などからも、自ら学びに向かう動機づけができていと捉えることができる。

[学習方略](多彩な交流活動)【使う】

- ・友達と学び合って、自分の考えをもつことができるようになった。(4年生)
- ・人の意見を見て考えて、自分の考えを持つことができるようになった。(4年生)
- ・先のことを予想して考えることができるようになってきた。(4年生)
- ・自分の考えに自信を持てるようになった。(4年生)
- ・評価シートがあったら、何に気を付ければいいかがはっきりする。(4年生)
- ・評価シートに合わせてできるから、しっかり内容が書ける。(3年生)
- ・評価シートを使ったら、感想がしっかり書けるようになった。(3年生)
- ・分からないことは先生や友達に聞けるようになった。(6年生)

これらの記述からは、交流活動により、自分の考えをもつことができるようになったり、自分の考えに自信がもてるようになったりしていることが分かる。また、どのようなことに留意して取り組めば解決に向かうかが明確になっていたり、解決への見通しをもって取り組めたりしているという点からも、いくつかの学習方略を身に付けて学習活動に取り組んでいることが分かる。

[メタ認知](価値づけ)【振り返る】

- ・自分たちで学習を生かし、次につなげるようになった。(4年生)
- ・何か分かってきた。じわじわと。(5年生)
- ・次の勉強に生かせるようになってきた。(5年生)
- ・どう進めればいいのか分かってきた。(5年生)
- ・どんなことに気をつけてするか、意識するようになった。(6年生)
- ・前できなかったことは、どうやってやろうかなと考えるようになった。(6年生)
- ・前にできなかった問題が少しできるようになってきた。(6年生)

これらの記述からは、「分かってきた」「なってきた」「じわじわと」という表現から少しずつではあるが着実に手ごたえを感じていることが分かる。「どう進めればいいのか分かってきた」という記述からは、できたかどうかという結果の評価ではなく、学習過程に対する評価(価値づけ)をしていることが分かる。「次へつなげる」「生かす」という記述もみられ、「振り返り」が過去を見るためだけではなく、次へつなげるための「前向きな振り返り」を感じる。そして、「前できなかったことは、どうやってやろうかと考えるようになってきた」という記述からは、振り返りが学習の振り返りではなく、学習活動の振り返りであることが分かる。

た。」「前にできなかった問題が少しできるようになってきた。」という記述は「自己調整力」がついてきているそのものの記述と捉えることができる。

このような記述から、評価シートを活用した取組は、児童の自己調整力を育むのに効果があったと考える。

しかしながら、5月と12月に実施した研究推進に関わる児童意識調査の比較では、5月と比べ、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に関する肯定的回答の割合がいずれも低下しており、特に「学びを深めていると、新たな『なぜだろう？』が生まれ、次の学習活動が楽しみだ。」という質問項目の肯定的回答の割合は26%低下した。また、「自分の学習の仕方を振り返り、改善点を見つけて次の学習に生かしている。」という質問項目に対する肯定的回答の割合は58%と全質問中、最も低い割合であった。

これらの要因として次のようなことが考えられる。

まず、指導者の意識の低下である。本校は昨年度10月に「広島県へき地教育研究大会（以下：へき地県大会）」を実施した。このへき地県大会に向けて、全教職員が様々な教育活動において、自分なりのアレンジを加えながら評価シートを活用してきた。9月段階では64種類の評価シートが開発されている。11月以降になると、評価シートの開発数も減少し、11月から3月までで14種類となっている。へき地県大会を境に教職員のモチベーションが低下したことは明らかである。ではなぜ、低下したのか？昨年度は評価シートの開発数にノルマなどは設定しておらず、教科も特定していなかった。それぞれの教職員がそれぞれの教科等で自由に開発していけるようにした。その結果、教職員間で開発数に個人差が出たり、教科に偏りが生まれたりした。そのため、評価シートの開発や活用が教員の一個人の範囲にとどまり、なかなか教職員同士での議論の広がりや深まりが生まれにくかった。このあたりが数値低下の一つの要因と考えられる。

次に、各教科の学力と評価シートとの相関関係の曖昧さ、効果の分かりにくさが挙げられる。先述した通り、昨年度は特定の教科に焦点化することなく、各教職員がそれぞれ作りやすい教科で評価シートを開発・活用してきた。その結果、評価シートが各教科の学力向上とどのように影響しているのか十分に吟味されないままであった。確かに児童の記述からは評価シートの有用性はある程度見て取れるが、評価シートと教科学習における学力向上との相関関係は分かりにくかった。

課題を次のように整理する。

《昨年度の課題》

教科を特定しなかったため、教職員同士の議論も深まりにくく、評価シートの有用性が見えにくく、学力向上との相関関係も分かりにくかった。

そこで、今年度は昨年度の研究をベースにしつつ、児童の「自己調整力の育成」を重点に、教科を算数科に焦点化した研究を進める。算数科の学力向上に資するような評価シートのさらなる進化を目指し、評価シートを活用した授業づくりを模索していく。また、学校教育目標にもある「自分らしさを育てる」ために、教職員一人一人も自分らしい授業を追究していけるよう学校教育目標や研究主題を踏まえた個人テーマをもって教育研究を進められるようにしていく。

【三和小中学校で身につけさせたい資質・能力】						
知識及び技能		思考力、表現力、判断力等		学びに向かう力、人間性等		
知識を生かし深める力		共に考え伝え合う力		自ら関わり学び続ける力		
区分	初期		前期		中期	
学年	小1・小2		小3・小4		小5・小6・中1	
知識を生かし深める力	①物事や事象への驚きや疑問をもつことができる。 (問い)	①驚きや疑問をもち、理解するための知識や情報、技能等を学び取ろうとすることができる。 (問い)	①驚きや疑問をもち、理解するための知識や情報、技能等を自ら獲得しようとするすることができる。 (問い)			
	②学んだことを活用して学習したり、生活に役立てたりすることができる。 (活用)	②概念的に形成された知識・技能を生活や学習の中で活用し、課題解決することができる。 (活用)	②思考・判断・表現を通じて概念的に形成された知識・技能を生活や学習の中で活用し、見直しをもって課題解決することができる。 (活用)			
	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして気付きや考えをもつことができる (概念的理解)	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして知識を形成することができる。 (概念的理解)	③生活や遊び、体験活動から得た知識などを生かして知識を形成することができる。 (概念的理解)			
共に考え伝え合う力	①身の回りのことや体験したことから情報を集め、比較し、特徴をとらえることができる。 (思考・判断)	①物事をとらえる視点を持ち、情報を比較・分類・関係付けたりしながら特徴や傾向をとらえ、目的に合わせて考え、判断することができる。 (思考・判断)	①物事をとらえる視点を持ち、目的や意図に応じて情報を比較・分類、関係付けたりしながら根拠をもって考察することができる。 (思考・判断)			
	②他者の考えと自分の考えを比較しながら話し合い等を行うことができる。 (協働)	②他者と協力して、多様な考えを出し合い、課題解決に向けた取組を行うことができる。 (協働)	②他者と協力して、多様な考えを出し合い、課題解決に向けて協働的に活動することができる。 (協働)			
	③言葉を適切に用いて、自分や友達の気付きや考え、よさなどを、順序を考えながら伝え合うことができる。 (表現)	③言葉を適切に用いて、伝える相手や目的に応じて理由や事例などを挙げながら伝え合うことができる。 (表現)	③相手や目的に応じて、言葉を適切に用い、事実と意見を区別したり、根拠や立場を明確にしたりして表現し伝え合うことができる。 (表現)			
自ら関わり学び続ける力	①自分から人・もの・ことと関わり合い、互いに楽しく活動しようとしている。 (コミュニケーション)	①他者と関わり合う中で、互いの気持ちや行動を理解し、関係を深めていこうとしている。 (コミュニケーション)	①他者と関わり合う中で、感情や行動をコントロールしながら、互いの関係を深めていこうとしている。 (コミュニケーション)			
	②学んだことよさや楽しさ、自己の成長を感じ、さらによりよくしようとする <u>ことができる。</u> (自己調整)	②学習計画を立てたり、学習内容や学習方法について振り返ったりしながら、自己の成長を自覚し、 <u>自らの学びを評価することができる。</u> (自己調整)	②見直しをもって学習計画を立てたり、学習内容や思考過程、学習方法などの観点をもって振り返ったりしながら、 <u>自らの学びを評価し、改善することができる。</u> (自己調整)			
	③自分で決めたことをやり切ろうとしている。 (自己実現)	③将来の夢や希望、憧れをもち、目標に向けて粘り強く取り組もうとしている。 (自己実現)	③自己理解を深め、将来の夢や希望、憧れをもち、目標に向けて粘り強く取り組もうとしている。 (自己実現)			

3 研究における問い

本研究における問いは次の通りである。

【本研究における問い】

- ① 本校児童における「自己調整力」とはどのような力か？
- ② 児童、教職員が「自分らしさ」を追究していけるような「算数科授業」の在り方とは？
- ③ 算数科の学力向上に資する「評価シート」の在り方とは？

4 研究内容

研究における問いの解決に向けて、様々な教科・領域において、次の点を取り入れる。

- (1) 自己調整の三つの要素（動機付け・学習方略・メタ認知）と学びのプロセス（見通す - 実行する - 振り返る）をリンクさせた探究的な教育実践を行う。

三要素	動機付け(どこに向かって)	学習方略(どうやって)	メタ認知(どうだったか)
学習過程	見通す 気付く 【自ら問いをもって探究す】	実行する 伸ばす 【人と関わり、協働して探究す】	振り返る 磨く 【学んだことや学び方を自己に生かす】
児童の姿・つぶやき	問いの表出・解決への見通し・ゴールイメージの交流、共有・価値の思考 ・「あっ!」「えっ!」 ・「なぜだろう?」 ・「もしかすると○○かも」 ・「やってみたい!」	個や集団で見方・考え方を吟味し、知識・技能を再構成・価値の探究 ・○○したら●●できた。 ・そういうことか! ・そういう考えもあるな。 ・他にもないかな。	見出した解(学び・学び方)について、その面白さやよさを実感・価値の創造 ・○○ってこういうことだ。 ・面白かった!次もやりたい ・便利だな。 ・もっとよくするには・・・
アクティビティ型	問いの表出, 創造 ・経験や体験を通した出会いから2段階での課題設定 ・解決に向かう探究活動を自己選択・自己決定 ・評価シートの作成	多彩な交流活動 ・自然発生的な交流⇔意図的な交流の往還 ・共通体験⇔試行錯誤の往還 ・具体⇔抽象の往還 ・評価シートの吟味	価値づけ, 客観視 ・評価シートの再考、修正 ・評価シートで相互評価 ・評価シートを用いた振り返り
ファシリテーション	場をつくり, つなげる 「どうしたい?」 「どうなりたい?」 「やってみる?」 「何のために?」 「どうなればいいのか?」 「どうなりそう?」	受け止め, 引き出す 「なるほど, 確かに。」 「本当に?」「もう他にはない?」 かみ合わせ, 整理する 「それってどういうこと?つまり?」 「どこに着目したの?」 「どんな関係?」「何がすごい?」	まとめて, 分かち合い, 伸ばす 「どんな力がついた?」 「どんな価値があった?」 「次はどうしたい?」 「○○ということかな?」 「○○というところがすごい!」 「どう生かす?」

(2) 評価シートの作成・交流

※別紙「評価シート」提案資料 参照

(3) 児童の姿で語り合う校内研修

実践交流の場において、児童の姿（写真など）や記述及び児童と作成した評価シートなどをもとに、教職員が児童、クラスの成長を語り合い、価値づけることで自らの教育観を見つめ直し、さらなる授業力向上につなげていく。「児童の姿を語る」のではなく、「児童の姿で語る」ことで、単なる伝達・報告にとどまらず、自らの見取り、価値づけや働きかけを交流し、教職員の中に新たな問いが表出し、アクティビティ型の授業やファシリテーションの在り方について探究する場となることを目指す。

(4) ツールの活用

① 対話・つぶやきの日常化

日々の授業において、「活動（作業）」や「協働（グループ学習）」を意図的に取り入れたり、児童が「つぶやきやすい環境」をつくったりすることで、児童が自然体で互いに学び合い、思考を深めることを楽しめるようにする。ペアやグループ学習では、考えを伝え合うだけにとどまらないようにする。

【対話の目的及び留意点】

- [1] 自分の考えを、根拠をもって示す。
- [2] 友達の考えを、敬意を持って聞く。
- [3] 互いの考え方の違いや類似点を踏まえて自分の考えをブラッシュアップする。
- [4] 全体において授業の流れに合わせて臨機応変に発言する。

② ホワイトボード・思考ツールの活用

グループでの児童同士のコミュニケーションを大切にしつつ、結論を出すことを急がず、対話とアイデアの創発を促すよう効果的に使う。ホワイトボードに慣れてきたら、課題に応じて思考ツールやタブレット上での操作・共有・編集等活用の幅を広げていく。

③ 学びシートの活用（教職員）※別紙「学びシート」提案資料参照

- ・研究授業で参観者による評価を授業改善に生かす。
- ・参観者は研究授業を自らの授業改善に生かす。

(5) やってみたいの実施

※別紙「スキルタイム」提案資料参照

5 研究に係る主な研修計画 ※追加あり

月日	研修内容	備考
4月4日(金)	小中合同研修会(研究推進構想)	
6月3日(火)	授業研究(熊本大学 前田康裕教授来校)	
6月	授業参観ウィーク①	
7月	研究推進に係るアンケート実施(1回目)	
8月	公開授業指導案検討	
9月	授業参観ウィーク②	
10月16日(木)	授業公開(熊本大学 前田康裕教授来校)	
12月	研究推進に係るアンケート実施(2回目)	
1月28日(水)	研究の成果と課題((熊本大学 前田康裕教授:オンライン)	
2月	三次市学力到達度検査 分析	
3月	研究のまとめ、次年度研究構想	
☆評価シートの交流等も適宜		

6 検証の指標

検証の視点	検証方法	達成目標
標準学力調査による学力定着度の客観的把握	三次市学力到達度検査(全国標準学力調査) ・3~6年生	全国平均以上が16項目中11項目以上(7割)
めざす姿に対する児童の意識調査	研究推進の検証に係る評価指標(児童意識調査) ・主体的な学び、対話的な学び、深い学び	肯定的回答8割
その他参考とする資料	<ul style="list-style-type: none"> ・評価シートの評価項目、記述内容の変容 ・児童、教職員による「成長の実感」に関する声、姿、記述など 	